



『あらすじで読み解く古事記神話』

(五月上旬発売)

三浦佑之

Sakuyuki Mizura | 立正大学教授

雑感——『古事記』編纂千三百年に

いう正真正銘の入門書である。

イザナキ・イザナミの出現からはじまり、初代天皇カムヤマトイハレビコの誕生までを語るといふ共通性を持ちながら、古事記と日本書紀とは、その神話の自身はまったく違ってよいほど違っている。もつとも大きな差異がみられるのは出雲神話の扱い方で、古事記では、オホナムヂを中心とした出雲の神々の冒険と地上世界(葦原の中つ国)の統一を語ることに神話全体の三分の一もの紙幅を費やしている。それに続く、天空世界(高天の原)を領有するアマテラスが、地上を自分の子孫が治める国にしようとして遠征軍を派遣し、オホクニヌシに譲渡を迫る場面いわゆる国譲り神話を加えると、古事記神話の四割が出雲の神々の栄光と敗北を語る物語になる。

それに対して日本書紀では、出雲の神々の神話をほとんど語ろうとはしない。そうでありながら、オホクニヌシに国譲りを迫る場面は語られるので、

早いもので「口語訳 古事記」という本を出して十年が過ぎた。すると区切りよく、古事記編纂千三百年の節目の年がやってきた。その間に『古事記講義』を出し『古事記を旅する』を出して、いずれも文春文庫にラインナップされた。それに加えて他社からは、

『古事記のひみつ』(吉川弘文館)とか『古事記を読みなおす』(ちくま新書)とかを出した。振り返ってみるとこの十年、古事記を食い物にしてきたよう

いささか面はゆい。おまけに近ごろでは古事記「序」に書かれている内容はあやしく、古事記は和銅五(七二二)年に成立したわけではないと声高に吹聴しながら、編纂千三百年関連の企画や催しには頻繁に顔を出す。

とにかく始末が悪いやつだ、そんなふうに見えるかもしれないと感じつつ、千三百年に便乗するかたちでもたもた古事記に関する本を出した。『あらすじで読み解く古事記神話』と

日本書紀の展開はとても不自然な印象を与えてしまう。しかも、神話としてはまるでおもしろみがない。

両者はまったく別の作品だと言ったほうがよいのだが、従来、自己批判もこめて言うと、古事記と日本書紀とで出雲神話の扱いがこれほど大きく違う原因や理由を正面から論じる研究はなされてこなかった。しかも、放置するだけならまだしも、「記紀」神話という呼称を用いて古事記と日本書紀とを合体させ、両者を抱き合わせるかたちで神話を論じてしまったために、出雲神話は古事記にしか存在しないという当然すぎる事実が消されてしまったのである。そこには、近代の神話研究における、ある種の作為とごまかしがあったと考えるをえない。

古事記は、なぜこれほど大きく出雲という世界を取り上げているのか。そのことを説明しないかぎり、古事記という作品を正當に評価することはできないというのが、現在のわたしの立場

である。日本書紀と同じく律令国家の息がかかった歴史書として編纂されたと考えるかぎり、古事記の真実は逃げたてしまう。古事記は律令国家の埒外に存在したのだ。ここ数年、そんなことばかり声高に主張し続けているのに、研究者たちは出雲神話の位置付けを回避しながら古事記を考えようとする。

わたしの影響力のなさを恥じるしかないが、最近では、従来の考えに染まりきった研究者を相手に議論しても埒が明かないのではないかと考えるようになった。古い先の短いわたしが今後しなければならぬのは、今まで古事記を読んだことがないという人に、古事記神話にはどのようなことが語られ、どのように読めるかということを説明するべきではないか。古事記が出雲という世界を描くことを通して伝えたかった日本列島の古代とはどういう世界だったのか、それをきちんと説明することが、次世代の古事記理解には欠かせないと思うからである。

日本列島の近代は、倒幕の戦いに勝利した維新政府によってもたらされた。その近代国家を支えるために、天皇が統治するただ一つの国家を称揚する必要があったのだし、そのために「記紀」神話は求められたのである。そして、そうした方向へ舵をきったことが、豊かに息づいていた古事記の神々を窒息させてしまうことになり、不幸な近代を招く結果にもなってしまったのではないか、わたしはそう考えている。

必要なことは、古事記を国家から解放し物語として自立させることだ。そしてそのために、まずは大きな枠組みとして、古事記の神話を把握する。その上で、それぞれの部分をどのように読めばいいかということを考える。その時、こまかな部分にこだわりすぎるのは何の实りももたらさない。必要なことは、神話というのはこんなにおもしろく興味深いものだったのだと思ってもらうことだ。本書ではその点だけに心を砕いたつもりである。